



宝蔵院にて 平成5年

大仏殿昭和大修理の大役を終えた翌年、別当を退任し、宝蔵院長となり。しかし、その後もテレビ出演や各地へ赴いての講演や揮毫等の多忙な日々は続き、書画、陶芸の作品制作にも一層励むようになり、一方で、これまでのできまな人々との出会いの中で収集された美術品も数多くあります。平成元年、これら公照作品と収集品の多くが郷里の姫路市へ寄贈されることとなりました。そして、平成六年七月、郷里近くに姫路市書写の里・美術工芸館が開館し、作品が常設で展示され今日に至っています。清水公照は同館名誉館長も務めました。平成十一年五月、八十八歳で遷化しました。しかし、今日でも各地にその作品は残り、根強い人気があります。

作品の特徴

この時代は、書にさらなる落ち着き加わり、ゆっくりとした筆遣いながら枯淡の味わいがあります。墨画はさまざまな色墨を用いてより華やかさを増しています。特に海外へ出かける機会が飛躍的に増えた時代ですので、世界各地の様子を鮮やかな色墨で絶妙に描いた作品が数多くあります。落款には「東大長老公照」「遊叟」「泥公照」「黙笑庵」などがあり、そのうち「遊叟」は昭和五十六年七十歳になってから自称した号です。また、この時代に限りませんが、別に「沙波」という俳号をもっており、俳句を記したときにはこの号が用いられています。



軸 十六大弟子 普賢菩薩 昭和62年

生誕百年 清水公照 人と作品

土に戯れ墨に遊ぶ



春季特別展示

清水公照は今年生誕百年を迎えました。本展では東大寺別当時代以前の初期の作品から晩年に至るまでの約二百五十点の書画、陶芸作品やコレクション、写真資料等を通じてその足跡をふりかえります。



紙本「お伽の国 花のパリーロマンの路」昭和58年



軸「鶏」



茶碗「鶴の図」九谷・竹隆窯



茶碗「老松の図」瀬戸・加藤鋳窯



茶碗「五風十雨」美濃・八坂窯



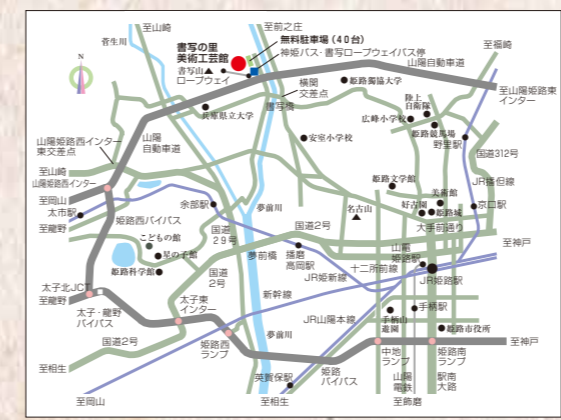
茶碗「奇峰」伊勢・神楽の窯



軸「鶴の図」平成4年



額「み」

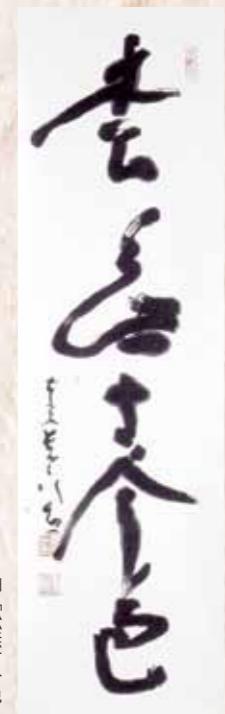


●交通のご案内●
JR・山陽電鉄姫路駅より神姫バス「書写ロープウェイ」行で約25分。終点下車徒歩約3分。姫路バイパス・中地ランプより約15分。山陽自動車道・姫路西インターより約10分。無料駐車場(45台)

展覧会情報
姫路市立美術館「生誕130年 松岡映丘」展 4月16日(土)～5月29日(日)
姫路文学館「黒田官兵衛の魅力」展 4月22日(金)～6月12日(日)



軸「竹呼清風」



軸「松無古今色」



大皿「飛天の図」九谷・竹隆窯 平成3年



壺「麗人の図」伊勢・神楽の窯

会期中のイベント

- アートキャンプ陶芸教室
5月5日(木祝)竹林工房・芝生広場
①10:00-12:00 ②13:00-15:00
参加費 1,000円 事前申込不要
- 講演会
「叔父・公照の思い出」5月3日(火祝)
午後1:30-2:30 講師：東道修造氏
会場：書写の里・美術工芸館会議室
定員：40名 受講無料
応募方法：4月22日(金)までに
往復はがき又は応募専用サイトで当館まで申込み、
応募多数の場合は抽選
- 展示解説会
4月24日(日)、5月8日(日)、22日(日)
いずれも午後1:30-2:30 講師：当館学芸員
会場：当館展示室 参加自由(要入館料)

主催：姫路市書写の里・美術工芸館 後援：毎日新聞社
平成23年
4月16日(土)～5月29日(日)

開館時間 午前10時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
入館料 一般300円、大学・高校生200円、中学・小学生50円
※20名以上の団体は2割引
休館日 毎週月曜日、5月6日
※4月29日～5月5日は休まず開館



姫路市書写の里・美術工芸館
〒671-2201 姫路市書写1223番地 Tel.079-267-0301 Fax.079-267-0304
http://www.city.himeji.lg.jp/kougei/



土に戯れ墨に遊ぶ



菁々中学校長時代 昭和22年頃

清水公照は明治四十四年、姫路市郊外の書写山麓の村で生まれました。一月三日、東道家の六男に生まれたことから「睦治」と名づけられました。小学六年で兄の勤める加西市の北条小学校へ転校し、十六歳で小野中学校（現小野高校）を卒業後、東大寺塔頭宝蔵院の清水公俊の下に入寺しました。これ以後、清水公照と名乗るようになります。龍谷大学で華嚴宗を学んだ後、自らの強い意志で天龍寺の閑精拙に師事し、禅を学びました。途中、何度もの兵役を挟みながらも、ようやく昭和三十八年、五十二歳で東大寺幼稚園の園長に就任し、その際園児の作る紙粘土細工にヒントを得て「泥仏」の創作を思い立ちます。また、園児が描く大仏さんの奇想天外な絵に触発されて墨画を描くようになり、昭和四十六年には絵日記を描き始め、晩年に至るまで二十五年以上続けました。このように園児とのふれあいが公照の後半生に大きな影響を与えることになりました。



軸「弁財天女」



軸「看雲」

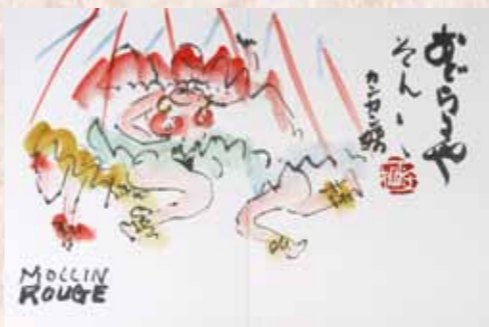


作品の特徴

最も初期の時代はまだほとんどが書の作品で、墨画はそれほど多くありません。書は線が細めで勢いがあり、時にかすれが見られ、薄墨の作品もあります。昭和四十年代後半になると彩墨を用いた作品も増えてきますが、まだ色遣いも少なく、全体的に暗い印象のものが多い傾向にあります。この時代は数多くの号を用いており、代表的なものとしては「多炎佛」「守拙」「李庵」「夢佛」「游僧」「鶏足」などがあります。そのうち「李庵」「夢佛」などは別当時代や長老時代に用いられています。



巻物「公照絵日記」 昭和46年1月



帖「花ぼとけ」 昭和48年



紙本「良寛と子どもたち」

別当時代

昭和50年4月〜56年3月

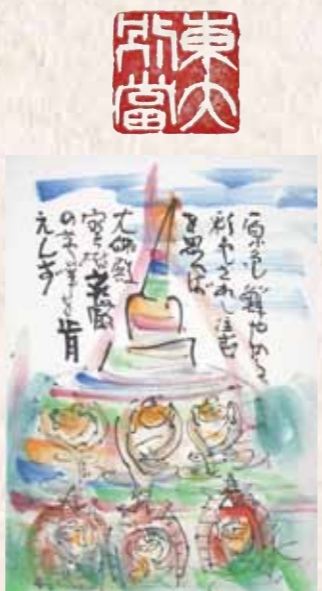
1975・1981



大修理中の大仏殿の前で



軸「華嚴」



帖「ボロボドール」 昭和55年

この時代は、書とともに色鮮やかな墨画を多く生み出しました。書は、前代のような厳しさはなく、力強さと落ち着いた感じのある書体へと変わっていきます。また、泥仏や陶芸作品への絵付けも数多く行われました。この時代の落款には、「東大別當」「華嚴長史」「夢佛」「李庵」「多炎」などが用いられています。印の数も飛躍的に増えます。また、昭和五十六年一月に七十歳を迎えたことから、このとき「古稀叟」の号が使われています。ただし、この年の四月に別当職を退任しますので、この号は長老時代にまたがって使用されています。

作品の特徴

昭和五十年四月、清水公照は華嚴宗管長、東大寺第二〇七世別当に就任します。折から大仏殿昭和の大修理の起工が前年に始まったばかりの大変な時期のことでした。修理には莫大な費用がかかるため、公照はその浄財集めに全国を行脚する日々が始まりました。ただそうした東奔西走の多忙な毎日の中でも、各地の墨元に赴いて土をひねり絵付けをする游戲三昧の心は忘れませんでした。問題に遊び、忙しさも遊びに変えてしまうところは、まさしく公照らしい生き方といえるでしょう。結局、東大寺別当を二期にわたって務めることとなり、昭和五十五年十月に大仏殿昭和の大修理を成し遂げました。落慶法要の当日は、前日の台風がうそのように晴れ渡って、大仏殿の鴟尾が金色に輝きました。この鴟尾が光り輝くさまを誰よりも感慨深く仰ぎ見たことでしょう。



茶碗「いろは歌」 京都・陶葺窯

茶碗「日日」萩・坂倉新兵衛窯



軸「修二会」



帖「にほん」 昭和54年



帖「阡陌草」 昭和52年



帖「自刻帖」 昭和56年



軸「晋山一句 自画像」



軸「行到水窮處」



軸「白雲自去來」



軸「夢」



軸「羊角而上者九萬里」



軸「忘却來時道」



軸「寒山詩趣」